

第3章

純粋な献愛奉仕 心のなかに起こる変化

第1節

श्रीशुक उवाच

एवमेतन्निगदितं पृष्टवान् यद्वान् मम ।
नृणां यन्म्रियमाणानां मनुष्येषु मनीषिणाम् ॥ १ ॥

śrī-śuka uvāca
evam etan nigaditam
pr̥ṣṭavān yad bhavān mama
nṛṇām yan mriyamāṇānām
manuṣyeṣu manīṣiṇām

śrī-śukaḥ uvāca—シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った; *evam*—そのように; *etat*—これらすべて; *nigaditam*—答えた; *pr̥ṣṭavān*—あなたが尋ねたから; *yat*—～であるもの; *bhavān*—優れたあなた; *mama*—私に; *nṛṇām*—人間の; *yat*—～である者; *mriyamāṇānām*—死への入り口に; *manuṣyeṣu*—人間のなかで; *manīṣiṇām*—知性ある者達の。

シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った。「マハーラージャ・パリークシットよ。あなたは、死の世界の入り口に立つ知性ある者たちにどのような義務があるのか尋ね、そして私はその問いに答えてきた」

要旨解説

全世界に何億何千万もの男性女性が住んでいますが、そのほとんどが知性に欠けています。精神魂についてほとんど知らないからです。自分たちが持っている濃密・希薄な体と自分を同一視しているため（もちろんそれは事実ではなく）、命についてまちがった観念しかない人たちばかりです。人間社会で高い・低いと評価づけされているさまざまな地位にいても、体と心を超越した自分について自問しなければ、社会でなにをしようと完全な失敗であることをよく理解しなくてはなりません。ですから、無数の人々のなかでたった

一人が精神的な自分について自問し、やがて『ヴェーダンタ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』、『シュリーマド・バーガヴァタム』といった啓示經典に答を求めるようになるのです。しかし經典を読んだり聞いたりしても、悟った精神指導者との導きがなければ、自己に関するほんとうの質を確かに悟ることはできません。そして、何千何百万もの人々のなかでも、ほんのわずかな人たちだけが主クリシュナをほんとうに知ることができます。『チャイタンニヤ・チャリタームリタ』（マデヤ第20章・第122-123節）では、「主クリシュナはいわれのない哀れみの心から、クリシュナとの純粋な絆をほとんど忘れてしまった賢い人々が読めるように、ヴァーサデーヴァという化身の姿でヴェーダ經典を示した」と言われています。そのような賢い人々でさえ、主と自分たちとの関係を忘れているのです。だからこそバクティ・ヨーガの方法全体が、その失われた関係を復活させるためにあります。この復活は、840万種類の生物進化の最後にある人間生活でこそ実現されるものです。人間のなかでもほんとうに知性をそなえた人々は、この機会を真剣に受けとめなくてはなりません。人間ならだれでも知性があるというわけではありませんから、人間社会の重要性がだれにでも理解されるわけではないのです。この節ではとくに *manīṣiṇām* (マニーシナーンム) 「思慮深い」という言葉が使われています。ですからマハーラージャ・パリークシットのようなマニーシナーンムの人物は、主クリシュナの蓮華の御足に心から身をゆだね、ハリ・カタームリタ、すなわち主の聖なる名前について聞いたり唱えたりする献愛奉仕に没頭しなくてはなりません。その行為が、死ぬ準備をしている人に特別に勧められています。

【第2編・第3章・第2－7節】

第2－7節

ब्रह्मवर्चसकामस्तु यजेत ब्रह्मणः पतिम् ।
 इन्द्रमिन्द्रियकामस्तु प्रजाकामः प्रजापतीन् ॥ २ ॥
 देवीं मायां तु श्रीकामस्तेजस्कामो विभावसुम् ।
 वसुकामो वसून् रुद्रान् वीर्यकामोऽथ वीर्यवान् ॥ ३ ॥
 अन्नाद्यकामस्त्वदितिं स्वर्गकामोऽदितेः सुतान् ।
 विश्वान्देवान् राज्यकामः साध्यान्संसाधको विशाम् ॥ ४ ॥
 आयुष्कामोऽश्विनौ देवौ पुष्टिकाम इलां यजेत् ।
 प्रतिष्ठाकामः पुरुषो रोदसी लोकमातरौ ॥ ५ ॥
 रूपाभिकामो गन्धर्वान् स्त्रीकामोऽप्सर उर्वशीम् ।
 आधिपत्यकामः सर्वेषां यजेत परमेष्ठिनम् ॥ ६ ॥
 यज्ञं यजेद् यशस्कामः कोशकामः प्रचेतसम् ।

विद्याकामस्तु गिरिशं दाम्पत्यार्थं उमां सतीम् ॥ ७ ॥

brahma-varcasa-kāmas tu
yajeta brahmaṇaḥ patim
indram indriya-kāmas tu
prajā-kāmaḥ prajāpatīn

devīm māyām tu śrī-kāmas
tejas-kāmo vibhāvasum
vasu-kāmo vasūn rudrān
vīrya-kāmo 'tha vīryavān

annādya-kāmas tv aditiṁ
svarga-kāmo 'diteḥ sutān
viśvān devān rājya-kāmaḥ
sādhyān saṁsādhako viśām

āyuṣ-kāmo 'śvinau devau
puṣṭi-kāma ilām yajet
pratiṣṭhā-kāmaḥ puruṣo
rodasī loka-mātarau

rūpābhikāmo gandharvān
strī-kāmo 'psara urvaśīm
ādhipatya-kāmaḥ sarveṣām
yajeta parameṣṭhinam

yajñam yajed yaśas-kāmaḥ
kośa-kāmaḥ pracetasam
vidyā-kāmas tu giriśam
dāmpatyārtha umām satīm

brahma—絶対者; varcasa—光輝; kāmaḥ tu—しかしそのように望む者; yajeta—崇拜する;
brahmaṇaḥ—ヴェーダの; patim—師; indram—天界の王; indriya-kāmaḥ tu—しかし、強い感
覚器官を欲しがる者; prajā-kāmaḥ—多くの子孫を望む者; prajāpatīn—プラジャーパティた
ち; devīm—女神; māyām—物質界の女性達に; tu—しかし; śrī-kāmaḥ—美しさを望む者;
tejaḥ—力; kāmaḥ—そのように望む者; vibhāvasum—火の神; vasu-kāmaḥ—富を望む者;

vasūn—半神ヴァス; *rudrān*—主シヴァのルドラ拡張体; *vīrya-kāmaḥ*—頑強に作られた肉体を望む者; *atha*—ゆえに; *vīryavān*—もともと力強い; *anna-adya*—穀物; *kāmaḥ*—そのように望む者; *tu*—しかし; *aditim*—半神達の母、アディティ; *svarga*—天国; *kāmaḥ*—そのように望んでいる; *aditeḥ sutān*—アディティの息子達; *viśvān*—ヴィシュヴァデーヴァ; *devān*—半神; *rājya-kāmaḥ*—王国を渴望する者達; *sādhyān*—半神サーデヤ; *samsādhakaḥ*—その望みを叶える物; *viśām*—商業者階級の; *āyuh-kāmaḥ*—長寿を望んで; *aśvinau*—アシュヴィニー兄弟として知られる二人の半神; *devau*—二人の半神; *puṣṭi-kāmaḥ*—頑強に作られた体を望む者; *ilām*—地球; *yajet*—崇拜しなくてはならない; *pratiṣṭhā-kāmaḥ*—優れた名声、あるいは安定した地位を望む者; *puruṣaḥ*—そのような者達; *rodasī*—地平線; *loka-mātarau*—そして地球; *rūpa*—美しさ; *abhikāmaḥ*—~を明確に求めている; *gandharvān*—非常に美しく、そして歌唱力に優れたガンダルヴァ惑星の住民達; *strī-kāmaḥ*—良妻を望む者; *apsaraḥ urvaśim*—天界の社交界の少女達; *ādhipatya-kāmaḥ*—他人を支配する望みを持つ者; *sarveśām*—誰でも; *yajeta*—崇拜しなくてはならない; *parameṣṭhinam*—宇宙の長、ブラフマー; *yajñam*—人格主神; *yajet*—崇拜しなくてはならない; *yaśaḥ-kāmaḥ*—有名になる望みを持つ者; *kośa-kāmaḥ*—恵まれた貯蓄を望む者; *pracetasam*—ヴァルナという名で知られた天界の出納官; *vidyā-kāmaḥ tu*—しかし、教育を望む者; *giriśam*—ヒマラヤ山脈の主(ぬし)、主シヴァ; *dāmpatya-arthaḥ*—そして夫婦愛のために; *umām satim*—ウマーという名で知られる主シヴァの貞節な妻。

非人格のブラフマジョーティの光に入りたい者は、ヴェーダの主(ぬし)(主ブラフマー、あるいは学識の僧侶ブリハस्पティ)を崇拜し、強い性的力を求める者は天界の王インドラを崇拜し、優れた子孫を望む者はプラジャーパティと呼ばれる偉大な先祖を崇拜しなくてはならない。幸運を望む者は、物質界を治めるドウルガーデーヴィーを崇拜しなくてはならない。力、金銭を求める者はヴァスたちを崇拜すべきである。偉大な英雄になりたい者は、主シヴァの化身であるルドラを崇拜しなくてはならない。大量の穀物を蓄えたい者はアディティを崇拜すべきである。天上の惑星に行きたい者はアディティの子息たちを崇拜しなくてはならない。王座が欲しい者はヴィシュヴァデーヴァを、そして大衆の人気を望む者は半神サーデヤを崇拜すべきである。長寿を求める者はアシュヴィニー・クマールという名の半神たちを崇拜し、強靱な体を求める者は地球を崇拜すべきである。安定した地位を望む者は地平線と地球を併せて崇拜すべきである。美しくありたい者はガンダルヴァ惑星の美しい住人たちを、良妻を求める者は天界に住むアプサラーとウルヴァシーの社交界の少女たちを崇拜すべきである。他人を支配する力を望む者は宇宙の長である主ブラフマーを崇拜しなくてはならない。揺るぎない名声を望む者は人格主神を、十分な貯金が欲しい者は半神ヴァルナを崇拜すべきである。ひじょうに博識な人間になりたいければ主シヴァを崇拜し、良好な夫婦関係を望むのであれば主シヴァの妻である貞節な女神ウマーを

崇拝すべきである。

要旨解説

特定の目標を達成しようとするさまざまな人々に多様な崇拝の方法が用意されています。物質界という制約された世界に住む条件づけられた魂は、物質的なことをすべて楽しめるわけではありませんが、この節が述べているように、半神を崇拝すれば、楽しもうとする対象を達成する影響力が得られます。ラーヴァナは主シヴァを崇拝して屈強になりましたが、主シヴァを喜ばせるためによく生首を捧げていました。そして主シヴァのおかげで権力を得て、半神たちはその力を恐れましたが、結局、人格主神シュリー・ラーマチャンドラに挑んだことで滅びました。つまり、物欲を求めるこのような人間、あるいは愚かな物質主義者は、『バガヴァッド・ギーター』（第7章・第20節）が断言しているように「賢くない」ということです。またこの節では、良識をことごとく失ってしまった者、あるいはマーヤーの惑わせる力で知性を奪われた者は、さまざまな半神を喜ばせたり科学を発達させて物質文化を高めたりして物欲を満たそうとする、とされています。人生のほんとうの問題は、生老病死という苦難の解決です。生きる権を奪われたくない、死にたくない、老いぼれたくない、病気になりたくない——それでも、このような問題は半神たちに頼んでも、物質科学に頼っても解決できません。『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』も、そのような知性のない人間たちは良識がまったくなく、とされています。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、「840万種類の生命体のなかでも、人間はもっとも希有で価値ある存在であり、その希な人類のなかでも、物質的な問題に気づいている者はさらに希な存在であり、さらに希なのは、主と主の献愛者たちのメッセージを収めている『シュリーマド・バーガヴァタム』の価値を知る者たちである」とされています。死はだれにも——賢くあろうが愚かであろうが——避けられません。しかし、パリークシット・マハーラージャはシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーから、*maniṣī*(マニーシー)、ひじょうに気高い心を持つ者、と呼ばれました。それはかれが、死ぬときに物欲をすべて捨て、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーという適切な人物から主の教えを聞いて主の蓮華の御足に完全に身をゆだねたからです。しかし、物質的な楽しみを求めて努力する人たちがめざす願望は、非難されています。そのたぐいの願望は墮落した人間が欲しがる陶酔物と同じです。賢い人はその望みを捨て、ふるさとに、神のもとに帰って得られる永遠な生活を求めなくてはなりません。

【第2編・第3章・第8節】

第8節

धर्मार्थ उत्तमश्लोकं तन्तुः तन्वन् पितृन् यजेत्
रक्षाकामः पुण्यजनानोजस्कामो मरुद्गणान् ॥ ८ ॥

*dharmārtha uttama-slokaṃ
tantuḥ tanvan pitṛn yajet
rakṣā-kāmaḥ puṇya-janān
ojas-kāmo marud-gaṇān*

dharma-arthaḥ—精神的な高まりのために; *uttama-slokaṃ*—至高主、または至高主に執着している者; *tantuḥ*—子孫のために; *tanvan*—そして彼らを守るために; *pitṛn*—ピトウリローカの住人たち; *yajet*—崇拝しなくてはならない; *rakṣā-kāmaḥ*—保護を求める者; *puṇya-janān*—敬虔な人々; *ojaḥ-kāmaḥ*—力を望む者は崇拝しなくてはならない; *marud-gaṇān*—その半神たち。

知識を得て精神的に高められたい者は、主ヴィシュヌと主の献愛者を崇拝し、子孫相続を守り、王家を繁栄させたいと望む者は、さまざまな半神を崇拝しなくてはならない。

要旨解説

宗教の道とは精神的に高められることでもあり、精神的な知識を高めることで、主の非人格の光、局所的様相、最後に主の個人としての姿という理解で究極的に主ヴィシュヌとの永遠な絆を取りもどすことができます。そして、優れた王家を築き、一時的な肉体的関係を高めて幸せになろうとする人も、ピターをはじめとする他の惑星に住んでいる半神たちの力にすぎらなくてはなりません。さまざまな半神を崇拝する多種多様な人々も、宇宙内に散在する半神たちの惑星に最終的に到達するのですが、ブラフマジョーティに浮かぶ精神的惑星に到達した人は、最高完成をきわめたこととなります。

【第2編・第3章・第9節】

第9節

राज्यकामो मनून् देवान् निर्र्तिं त्वभिचरन् यजेत् ।
कामकामो यजेत् सोममकामः पुरुषं परम् ॥ ९ ॥

*rājya-kāmo manūn devān
nirṛtiṃ tv abhicaran yajet*

kāma-kāmo yajet somam
akāmaḥ puruṣam param

rājya-kāmaḥ—帝政あるいは王国を望む者はだれでも; *manūn*—マヌ、神の半・化身; *devān*—半神; *nirṛtim*—悪魔; *tu*—しかし; *abhicaran*—敵に対する勝利を望んでいる; *yajet*—崇拜すべきである; *kāma-kāmaḥ*—感覚満足を願う者; *yajet*—崇拜すべきである; *somam*—チャンドラという名前の半神; *akāmaḥ*—満たすべき物欲のない者; *puruṣam*—最高人格主神; *param*—至高者。

王国あるいは帝国を治めたいと望む者はマヌを崇拜しなくてはならない。敵に勝利したいと願う者は悪魔を崇拜し、感覚満足を求める者は月を崇拜しなくてはならない。しかし、物質的な楽しみなど眼中にない者は、最高人格主神を崇拜しなくてはならない。

要旨解説

解放されている人にとって、これまで挙げられて楽しみなどまったく価値がありません。外的な力という物質の様式に条件づけられた人たちだけが、さまざまな物欲に心が奪われてしまうのです。言いかえると、超越主義者には満たしたい物欲がなく、いっぽう物質主義者にはあらゆる物欲を満たしたがっている、ということです。主は宣言しています——物質的な楽しみを求め、これまで述べられてきたさまざまな半神の恩寵を求めている物質主義者は感覚が抑えきれず、愚かな人間でありつづける、と。ですから、最高人格主神を崇拜するほどの分別があるのですから、どのような物質的な楽しみも欲しがらざるべきではありません。愚人を導く指導者は愚人よりも愚かです。どの半神も崇拜すればいい、得られる結果は同じだから、などと愚かにも公言しているからです。このような教えを広めるのは、『バガヴァッド・ギター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えに反するばかりか、どの切符を買っても同じ目的地に到着する、と言うのが愚かであるように、かれらの教えは愚の骨頂です。パローダ行きの切符を買ったら、デリーからムンバイに行けるはずがない。この節で名言されているように、いろいろな望みで頭がいっぱいの人は多様な崇拜形式に従うけれども、そんなきもちのない人は至高主、シュリー・クリシュナ、人格主神を崇拜しなくてはなりません。そして、その崇拜方法が献愛奉仕です。純粋な献愛奉仕とは、果報的活動や経験に頼る推論も含む物欲がいっさいない主への奉仕です。物欲を求めて至高主を崇拜することもできますが、そのような崇拜から得られる結果はまた別物であり、次の節でそのことが説明されます。ふつう、主はだれの物欲も満たしたりしませんが、主を崇拜する者にその恩恵を与えることもあります——やがてかれらが物質的な楽しみを望まなくなるからです。結論として、物質的な楽しみを求めるきもちも最小限に抑えるべきであり、そのためには、この節で *param* (パラム) 「物質的なものすべてを超えてい

る」と説明されている最高人格主神を崇拝すべきである、ということです。シュリーパーダ・シャンカラ・チャーリヤも *nārāyaṇaḥ paro 'vyaktāt* (ナーラーヤナハ、パロー・アヴァクタートゥ) と詠みました。至高主は物質的な次元を超えた方である、と。

【第2編・第3章・第10節】

第10節

अकामः सर्वकामो वा मोक्षकाम उदारधीः ।
तीव्रेण भक्तियोगेन यजेत पुरुषं परम् ॥ १० ॥

*akāmaḥ sarva-kāmo vā
mokṣa-kāma udāra-dhīḥ
tīvreṇa bhakti-yogena
yajeta puruṣam param*

akāmaḥ—すべての物質的望みを超越した者; *vā*—どちらも; *mokṣa-kāmaḥ*—解放を望む者; *udāra-dhīḥ*—広い知性で; *tīvreṇa*—強い力で; *bhakti-yogena*—主への献愛奉仕によって; *yajeta*—崇拝すべきである; *puruṣam*—主; *param*—至高の全体者。

物欲をすべて満たしたいと思っていようが、物欲がまったくなかろうが、あるいは解放を求めていようが、広い知性を持つ者は必ず至高の全体者・人格主神を崇拝しなくてはならない。

要旨解説

最高人格主神、主シュリー・クリシュナは、『バガヴァッド・ギーター』で *puruṣottama* (プルショーッタマ)・最高人格者と表現されています。非人格論者が主の体から出ている光・ブラフマジョーティのなかに入りたいと望んでも、それを叶えるのはほかならぬ主です。ブラフマジョーティと主は離れているわけではありません。太陽の光が太陽本体と離れて存在していないのと同じです。ですから、至上の非人格的ブラフマジョーティに入りたがっている人でも、『シュリーマド・バーガヴァタム』がここで勧めているように、バクティ・ヨーガで主を崇拝しなくてはなりません。この節では、完全な完成を手にする方法としてとくにバクティ・ヨーガが勧められています。前の章では、バクティ・ヨーガがカルマ・ヨーガとギヤーナ・ヨーガの究極目標であると言われましたが、この章でも、バクティ・ヨーガはさまざまな半神を崇拝する多様な方法の究極目標であることが強調されています。自己を悟るもっとも高い方法だから勧められているのです。ですから、だれでもバ

クティ・ヨーガを真剣に実践しなくてはなりません。物質的な楽しみや束縛からの解放を望んでいるとしても。

Akāmaḥ (アカーマハ) は、物質的な望みを持たない者、という意味です。生命体は、至高の全体者「*puruṣam pūrṇam* (プルシャンム プールナンム)」の部分体ですから(体の一部分のように)、もともと至高の生命体・完全体に使える機能を自然にそなえています。ですから、「無欲」とは、石のようになにもしなくなるのではなく、自分のほんとうの立場を意識し、至高主の満足だけを望むようになる、ということです。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、自著『サンダルバ』で、その無欲の境地を *bhajanīya-parama-puruṣa-sukha-mātra-sva-sukhatvam* (バハジャニーヤ・パラマ・プルシャ・スカハ・マートツラ・スヴァ・スカハトツヴァンム) と説明しています。これは、「至高主の幸せをみずから体験し、その体験をとおして自分も幸せになる」、という意味です。生命体のこの本能は物質界の条件づけられた状態でも現われ、未発達の知性しかない愚かな人たちが、利他主義、博愛主義、社会主義、共産主義などを唱える様子に見ることができます。通俗な世界で見られる社会・地域社会・家族・国・人類のための善行は、「至高主の幸福をとおして自分も幸福になる」という純粋な生命体の本来の感情が部分的に現われているのです。その優れた感情は、主を幸せにすることしか考えていないヴラジャブーミの乙女たちが示しています。見返りなど思わずに主を愛していましたが、この思いこそが、*akāmaḥ* (アカーマハ) の特質の完璧な現われです。カーマの特質、すなわち自分の満足を求めるきもちも、物質界で完全に現われていますが、アカーマの特質は精神界で完全に現われています。

主と一つになる、あるいはブラフマジョーティと融合するという考え方は、それが物質的苦しみに救われたい一心からの望みであれば、それもカーマの特質の現われです。純粋な献愛者は、解脱を達成すれば生活の苦しみからも解放される、とも思いません。よく言われる「解放の境地」さえ望まず、主を満足させることだけ考えています。アルジュナはカーマの特質に惑わされていたので、クルクシェートラの戦場で戦うことをためらっていましたが、「親族を救う、そして自分も満足する」と思っていたからです。しかし、純粋な献愛者でしたから、主の教えどおりに戦うことにしました。まちがいに気づき、自分の満足を犠牲にしても主を満足させるのがなによりも大切な自分の義務である、と悟ったからです。そしてアカーマになりました。それが完璧な生命体の完璧な境地です。

Udāra-dhiḥ (ウダーラ・ディーヒ) とは、広い視野のある人のことです。物質的な楽しみを求める人たちはちっぽけな半神を崇拜しますが、その程度の知性は『バガヴァッド・ギーター』(第7章・第20節)で、*hr̥ta jñāna* (フリタ ジャーナ) 「分別を失った者の知性」と非難されています。半神を崇拜しても、至高主の許しがなければ結果はいっさい得られません。ですから広い視野のある人は、物質的な望みを叶えるにしても、それを授ける究極の権威者は主であることを知っています。だからこそ広い視野を持つ人は、物質的な楽しみや解放への望みを持っているとしても、主を直接崇拜しなくてはなりません。そしてだれであ

っても、アカーマであろうとサカーマであろうと、そしてモークシャ・カーマだとしても、できるかぎりの便宜をはかって主を崇拜すべきです。これは、バクティ・ヨーガはカルマやギヤーナにかかわることなく実践できる、ということも含まれています。直射日光はその強力さゆえに*tīvra* (ティールヴァ) と呼ばれますが、同じように、聞く、唱えるというバクティ・ヨーガはほかのなにものとも混ぜる必要がなく、心にどんな動機があっても、だれにでも実践できます。

【第2編・第3章・第11節】

第 1 1 節

एतावानेव यजतामिह निःश्रेयसोदयः ।
भगवत्यचलो भावो यद् भागवत्स्रातः ॥ ११ ॥

etāvān eva yajatām
iha niḥśreyasodayaḥ
bhagavatya acalo bhāvo
yad bhāgavata-saṅgataḥ

etāvān—このさまざまな崇拜者たちすべて; *eva*—確かに; *yajatām*—崇拜しているあいだ; *iha*—この生涯で; *niḥśreyasa*—最高の恩恵; *udayaḥ*—発達; *bhagavati*—最高人格主神に対する; *acalaḥ*—揺るぎない; *bhāvaḥ*—自然な魅力; *yat*—～であるもの; *bhāgavata*—主の純粋な献愛者; *saṅgataḥ*—交流。

無数の半神を崇める者たちでも、最高人格主神への揺るぎない自然な愛着という無上の恩恵をさずかるが、それは主の純粋な献愛者との交流だけをとおして得られる結果である。

要旨解説

最初に創造された半神・ブラフマーから小さなアリにいたるまで、物質創造界のさまざまな環境に住む全生命体は、物質自然界の法則、すなわち至高主の外的力に条件づけられています。純粋な境地にいる生命体は、「私は主の部分体である」という事実がわかっているのですが、物質エネルギーを支配する望みゆえに物質界に投げこまれると、物質自然界の三様式に条件づけられ、最上の恩恵をもとめて苦闘するようになります。この生存競争は、物質的な楽しみという魔力に駆りたてられて狐火を追いもとめる様子に似ています。

この章で述べられてきたさまざまな半神崇拜、そして神や半神に頼らない科学的知識という近代発展は、どちらも幻です。幸せになろうとしてそのような計画をたてても、物質

創造界のなかで縛られた生命体は、誕生・死・老年・病気という生活の問題は決して解決できないからです。宇宙の歴史はそのような計画者の名前で満たされていますが、無数の国王や皇帝が現われては消え、計画作成の歴史にその名前を残してきました。しかし、人生の一番大切な問題は、かれらの努力にかかわらず、未解決のまま残されるのです。

じつは、私たちの生涯は真の問題を解決するためにあります。さまざまな崇拜方法に従って半神を満足させても、あるいは神や半神に頼らないいわゆる科学的知識を高めても、その問題を解決させることはできません。神や半神にはまったく関心を寄せない愚かな物質主義者はさておき、ヴェーダはさまざまな恩恵が得られる崇拜を勧めているのですから、半神の存在はまやかしても想像でもありません。私たちが存在するようにかれらも存在しますが、宇宙を統括するさまざまな分野で主に直接仕えていますから、私たちよりはるかに強い力をそなえています。『バガヴァッド・ギーター』がこのことを確証していますし、最高の半神である主ブラフマーを含むさまざまな半神が住む惑星についても記述されています。愚鈍な物質主義者は、神はおろか半神の存在さえ信じませんし、惑星が半神に支配されていることも信じません。もっとも近いチャンドラローカ、すなわち月に行くために大騒ぎしているのに、機械で調査を尽くしてもこの星のことではほとんど知らず、月の地面を販売するという嘘八百を並べても、横柄で愚かな科学者や物質主義者はそこに住むこともおぼつかないのですから、数えることさえできないほかの惑星など行けるはずがありません。いっぽう、ヴェーダの従者たちは別の方法で知識を得ます。第1編で説明したように、かれらはヴェーダ經典のことばをすべて受けいれますから、神や半神について、物質界を超えた、あるいは物質界のなかにあるかれらの居住惑星について完全に正しい知識を持っています。もっとも信頼できるヴェーダ經典は、インドで最高権威者とされているシャンカラ、ラーマーヌジャ、マドゥヴァ、ヴィシュヌ・スヴァーミー、ニンバルカ、チャイタンヤたちによって受けいられ、さらに世界中の重要な偉人たちがこぞって学んでいるのは『バガヴァッド・ギーター』であり、そのなかで半神とその住居の崇拜について言及されています。『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第25節）が確証しています。

yānti deva-vratā devān
pitṛn yānti pitṛ-vratāḥ
bhūtāni yānti bhūtejyā
yānti mad-yājino 'pi mām

「半神を崇拜する者は半神のなかに生まれる。祖先を崇拜する者は祖先のもとへ行く。幽霊や邪鬼を崇拜する者はそのような生物のあいだに生まれる。そしてわたしを崇拜する者は、わたしとともに住む」

『バガヴァッド・ギーター』は、「ブラフマローカを含む物質界の全惑星は一時的に特定の場所にあるだけで、一定期間後に消滅する」と言っています。ですから、半神にしてもかれらの従者にしても、宇宙が破壊されれば消えていくのですが、神の国に入った人々は永遠の生活を永遠につづけます。それがヴェーダ經典の見解です。半神を崇拜する人々は、信じない人が得られない1つの恩恵を授かります。それは、ヴェーダの見解を確信しているからこそ、主の献愛者との交流をとおして「至高主を崇拜する恩恵」が得られる、ということです。しかし、愚かな物質主義者はヴェーダの教えを知らないため、経験にもとづく不完全な知識、あるいは物質科学にもとづくまちがった確信に動かされ、いつまでも暗闇にとどまります。そのような知識では超越的な科学の領域に到達できないのです。

ですから、愚かな物質主義者やかりそめの半神崇拜者は、主の純粋な献愛者という超越主義者とふれあう機会に恵まれなければ、なにをしても労力の無駄です。主の献愛者という神聖な人物の恩恵だけで、人間生活の最高完成である純粋な献愛奉仕に到達することができます。主の純粋な献愛者だけが、進歩的な生活という正しい道をしめすことができます。それ以外は、神や半神を知らない物中心の生き方も、はかない喜びを求める半神を崇拜する生活も幻想にすぎません。『バガヴァッド・ギーター』はその点も巧みに説明していますが、この書物の教えは純粋な献愛者との交流をとおしてこそはじめて理解できるものであり、政治家や無味乾燥の哲学的推論者からはなにも学べません。

【第2編・第3章・第12節】

第12節

ज्ञानं यदाप्रतिनिवृत्तगुणोर्मिचक्र-
मात्मप्रसाद उत यत्र गुणेष्वस्राः ।
 कैवल्यसम्मत्पथस्त्वथ भक्तियोगः
 को निर्वृतो हरिकथासु रतिं न कुर्यात् ॥ १२ ॥

*jñānaṁ yad āpratīnivr̥tta-guṇormi-cakram
 ātma-prasāda uta yatra guṇeṣu asaṅgaḥ
 kaivalya-sammata-pathas tv atha bhakti-yogaḥ
 ko nirvṛto hari-kathāsu ratiṁ na kuryāt*

jñānam—知識; *yat*—～であるもの; *ā*—～の限界まで; *pratīnivr̥tta*—完全に退いて;
guṇa-ūrmi—物質界の様式の波; *cakram*—渦巻き; *ātma-prasādaḥ*—自己満足; *uta*—さら
 に; *yatra*—～があるところ; *guṇeṣu*—自然の様式の中に; *asaṅgaḥ*—無執着; *kaivalya*—超越的;
sammata—承認されて; *pathaḥ*—道; *tu*—しかし; *atha*—ゆえに; *bhakti-yogaḥ*—献愛奉仕;

kaḥ—誰が; nirvṛtaḥ—～に没頭して; hari-kathāsu—主に超越的な話題の中で; ratim—魅力; na—～ではない; kuryāt—する。

至高主ハリと関係のある超越的な知識は、物質界の様式という波と渦をすっかり静めてくれる知識を与えてくれる。それは自ら満たされている知識である——物質的な執着とは無縁で、崇高な質に満たされているために権威者たちに認められているからである。この知識に心惹かれない者がいるだろうか。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第10章・第9節）は、純粋な献愛者の気質はすばらしい、と言います。かれらが見せる非の打ち所がない活動は、主への奉仕に励む思いに満たされており、自分たちのあいだで法悦感や超越的な至福を感じあっています。この崇高な喜びは、正しい精神指導者に導かれて行なえば、献愛奉仕の活動の段階（*sādhana-avasthā* サダハナ・アヴァスタハー）にいても味わうことができます。円熟した段階になると、その崇高な感情は主との特別の絆を悟る形で頂点に達し、その感情こそが生命体がもともとそなえる気質です。このように、バクティ・ヨーガは、神を悟る唯一の方法だからこそ、*kaivalya*（カイヴァリヤ）と呼ばれています。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、この点に関連してヴェーダの節を *eko nārāyaṇo devaḥ, parāvarāṇām parama āste kaivalya-samjñitaḥ*（エーコー ナーラーヤノー デーヴァハ、パラヴァラーナーナム パラマ アースター カイヴァリヤ・サンムギタハ）と引用し、「ナーラーヤナ・人格主神をカイヴァリヤ、そして主に近づくことのできる方法をカイヴァリヤ・パンター（*kaivalya-panthā*）、すなわち神に到達する唯一の方法と言う」と断言しました。このカイヴァリヤ・パンターはシュラヴァナ（*śravaṇa*）「人格主神にまつわる話を聞くこと」から始まり、このハリ・カター（*hari-kathā*）から生まれる自然な結果は「超越的知識の獲得」であり、その結果献愛者は俗な話に無頓着になり、なんの味わいも感じなくなります。献愛者にとって、通俗な活動は（社会的・政治的なものでも）味気ないものと思え、自分の体にでさえ関心を失うのですから、自分の体に関係することにも興味なくなるのは当然です。この心境になった人は、三様式の波にも乱されなくなります。物質の様式にはいくつも種類がありますが、俗な人々が関心を寄せている、あるいはかかわっている俗な活動はどれも、献愛者にはつまらないものに思えてきます。その心境がこの節で *pratinivṛtta-guṇormi*（プラティニヴリッティ・グノールミ）と述べられており、それは *ātma-prasāda*（アートウマ・プラサーダ）「物質的なものとは無縁の完全な自己満足」によって可能になります。主の一流の献愛者は献愛奉仕をとおしてこの境地に入りますが、すでにそのような気質をそなえているのに、主を満足させるために、主の栄光を賞賛する布教徒として積極的に活動するようになり、その奉仕のためにすべてを（俗なことでも）取り入れます。その目的は一つ、初心の人々が持つ俗な関心を崇高な喜びに変えることで

す。シュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーは、純粋な献愛者によるこの活動を *nirbandhaḥ kṛṣṇa-sambandhe yuktam vairāgyam ucyate* (ニルバンダハ クリシュナ・サンバンデヘー ユクタナム ヴァイラーギヤム ウッチャテー) と表現しています。通俗な行ないであっても、主への奉仕にあてはめれば超越的な活動になりますし、またカイヴァリヤの活動として認められるようになります。

【第2編・第3章・第13節】

第13節

शौनक उवाच

इत्यभिव्याहृतं राजा निशम्य भरतर्षभः ।
किमन्यत्पृष्टवान् भूयो वैयासकिमृषिं कविम् ॥ १३ ॥

śaunaka uvāca

ity abhivyāhṛtam rājā

niśamya bharatarṣabhaḥ

kim anyat pṛṣṭavān bhūyo

vaiyāsakim ṛṣim kavim

śaunakaḥ uvāca—シャウナカが言った; *iti*—そのように; *abhivyāhṛtam*—語られたことすべて; *rājā*—王; *niśamya*—聞くことで; *bharata-ṛṣabhaḥ*—マハーラージャ・パリークシット; *kim*—何; *anyat*—さらに; *pṛṣṭavān*—彼に尋ねたか; *bhūyah*—再び; *vaiyāsakim*—ヴァーサデーヴァの子に; *ṛṣim*—造詣が深い者; *kavim*—詩的。

シャウナカが言った。「ヴァーサデーヴァの子、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはひじょうに博識な聖者であり、ものごとを詩的に説明することができる人物です。そのような方の話を聞いたあと、マハーラージャ・パリークシットは次はどう尋ねたのでしょうか」

要旨解説

主の純粋な献愛者は、ごく自然に神聖な気質を培 (つちか) うのですが、次のような質が特筆できます。親切で、平安で、誠実で、心おだやかで、過ちをおかさず、寛大で、温厚で、清潔で、所有心がなく、だれの幸せも望み、満足し、クリシュナに身をゆだね、なにかを渴望することなく、純真で、意志が固く、自己を抑えることができ、バランスのとれた食事をし、分別があり、行儀正しく、高慢でなく、威厳があり、同情心あふれ、友好的で、

詩的で、熟達し、そして物静かです。クリシュナダーサ・カヴィラージャが自著『チャイトンニャ・チャリタームリタ』で説明しているように、献愛者に見られるこの26の特質のなかで、「詩的」という質がこの節でシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに関連して述べられています。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが詠(うた)いあげた『シュリーマド・バーガヴァタム』は、もっとも気高い詩的な作品と言えます。自己を悟った聖者なのですから。さらに、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは聖者たちのなかでも偉大な詩人である、ということも如実に物語っています。

【第2編・第3章・第14節】

第14節

एतच्छ्रुषतां विद्वन् सूत नोऽर्हसि भाषितुम् ।
कथा हरिकथोदकाः सतां स्युः सदसि ध्रुवम् ॥ १४ ॥

*etac chuśrūṣatām vidvan
sūta no 'rhasi bhāṣitum
kathā hari-kathodarkāḥ
satām syuḥ sadasi dhruvam*

etac—この; *śuśrūṣatām*—聞きたがっている者たちの; *vidvan*—博識なる者よ; *sūta*—スータ・ゴースヴァーミー; *naḥ*—私たちに; *arhasi*—それをしてくださるように; *bhāṣitum*—それをおを説明してください; *kathāḥ*—話題; *hari-kathā-udarkāḥ*—結果として主の話題になる; *satām*—献愛者たちの; *syuḥ*—～になる; *sadasi*—～の集まりの中で; *dhruvam*—確かに。

博識なるスータ・ゴースヴァーミー様よ。私たちはもっとそのことについて聞きたいと思っていますので、話をお続けください。それだけではありません。やがては主ハリについて語りあうことになる話題は、献愛者のあいだで交わすべきことだからです。

要旨解説

ルーパ・ゴースヴァーミー著『バクティ・ラサームリタ・シンドウ』を引用したように、通俗なことでも、主シュリー・クリシュナへの奉仕に取り入れれば、結果は超越的なものになります。たとえば、『ラーマヤナ』や『マハーバーラータ』といった叙事詩や史書は、知性に欠ける人々（女性、シュードラ、高貴な階級に生まれてもそれに値しない息子たち）のために書かれたものですが、ヴェーダ経典として受けいれられています。主の活動が収められているからです。『マハーバーラータ』は、4つのヴェーダ——サーマ、ヤ

ジュル、リグ、アタルヴァ——が編纂されたあとの第5のヴェーダとされています。知性のない人たちは『マハーバーラタ』をヴェーダの部分にあたることを認めませんが、偉大な聖者や権威者たちはヴェーダの5番目の部分にあたるものとしています。『バガヴァッド・ギーター』も『マハーバーラタ』のなかに含まれており、知性の低い段階の人たちに授けた主の教えで満たされています。『バガヴァッド・ギーター』は世帯者のために作られたものではない、と言う人たちもいますが、そういう愚かな人たちは『バガヴァッド・ギーター』がグリハスタ（家族を持つ人間）であるアルジュナに説明され、説明している主本人もグリハスタとしての職務をまっとうしていた、という事実を忘れてしています。ですから、『バガヴァッド・ギーター』はヴェーダの知恵という高尚な哲学が含まれていても、超越的な科学を学ぶ初心者のために用意されているのであり、『シュリーマド・バーガヴァタム』はその科学の大学卒業者と大学院生の段階にある、と言えます。『マハーバーラタ』、各『プラーナ』、他の経典は主の娯楽について満たされており、どれも超越的な経典で、偉大な献愛者のあつまりのなかで互いの強い信頼感をとおして話し合われるべきものです。

そこで問題になるのは、そのような経典が職業人に説明されると、崇高な内容がありきたりの歴史書や叙事詩に解釈されてしまう、という点にあります——じっさいに歴史的な事実や人物が登場するからです。だからこその節では、「ヴェーダ経典は献愛者のあつまりをとおして話し合われるべきものである」と言われているのです。献愛者による説明でなければ、高い段階にいる人々が味わうことはできません。結論として、主は非人格的存在ではない、と言えます。主は至高の人物であり、さまざまな活動を繰りひろげています。主は全生命体の筆頭者であり、みずからの意志で降誕し、みずからの力を使って墮落した魂を救います。このように、主は社会、政治、宗教の指導者のように行動します。その行動をとおして私たちは主の話題が聞けるのですから、たとえ初歩的であってもそのような話題はどれも超越的です。それが、人々の行動を精神化させる方法です。だれでも歴史、物語、フィクション、ドラマ、雑誌、新聞など、さまざまな俗な話題に聞きたがるものですから、それを主への崇高な奉仕と合致させればいいのであり、そうあってこそ献愛者が味わえる話題に変わっていきます。主に人格はない、活動もしない、名前も姿もなく、話もしない石ころである、と言いつらすことで、聞いた人を神論にし、信仰心のない悪魔的な人間にすることを助長しましたし、言いつらすかれら自身も主の崇高な活動から逸れていけばいくほど俗なことを没頭するようになり、結果として神のもとに帰るのではなく、地獄に落ちていく道のみずから広げています（注1）。『シュリーマド・バーガヴァタム』はパーンダヴァ兄弟たちの歴史（必要とされていた政治・社会活動）から始まりますが、『パラマハンサ・サムヒター』（*Pāramahansa-saṁhitā*）、すなわち頂点の超越主義者のためにあるヴェーダ経典と呼ばれ、パラマ・ギヤーナ (*param jñānam*) 「最高の超越的知識」について説いています。主の純粋な献愛者たちは、牛乳と水が混ざっても牛乳だけを

吸いだせる白鳥たちにたとえられるパラマハンサばかりです。

(注1) 5000年前でさえ、インドの社会では、市民が主の活動にかかわりのない本は一切読まないよう配慮されていました。主に関係のない祭典や儀式も執行されず、主の娯楽ゆえに神聖かつ浄化された場所以外を訪ねることもありませんでした。ですから、村に住む一般人たちでさえ、『ラーマーヤナ』、『マハーバーラータ』、『バガヴァッド・ギーター』、『シュリーマド・バーガヴァタム』について、幼いころから話していました。しかしカリ時代の影響で、人々は犬や豚の文化に転落し、超越的な知識など無視してただ食べ物のためにあくせく働くようになってしまったのです。

【第2編・第3章・第15節】

第15節

स वै भागवतो राजा पाण्डवेयो महारथः ।

बालक्रीडनकैः क्रीडन् कृष्णक्रीडां य आददे ॥ १५ ॥

*sa vai bhāgavato rājā
pāṇḍaveyo mahā-rathaḥ
bāla-kṛīḍanakaiḥ kṛīḍan
kṛṣṇa-kṛīḍām ya ādade*

saḥ—彼; vai—確かに; bhāgavataḥ—主の偉大な献愛者; rājā—マハーラージャ・パリークシット; pāṇḍaveyaḥ—パーンダヴァ兄弟の孫; mahā-rathaḥ—偉大な戦士; bāla—幼い頃; kṛīḍanakaiḥ—人形で遊ぶ; kṛīḍan—遊んでいる; kṛṣṇa—主クリシュナ; kṛīḍām—活動; yaḥ—～である者; ādade—受け入れた。

マハーラージャ・パリークシットはパーンダヴァ兄弟の孫にあたり、幼いころから主の偉大な献愛者でした。人形と遊んでいるときでさえ、家族で祭られていた神像のように、その人形を主クリシュナのように崇拝していたのです。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』(第6章・第41節)で言われているように、ヨーガ修練を正しく実践できなかつた人でも、信念の篤いブラーフマナの家に生まれたり、クシャトリヤの王や裕福な商家に生まれたりする機会が与えられます。しかし、マハーラージャ・パリークシットはそれ以上の方です。生まれたときから偉大な献愛者であり、だからこそク

ル家の、特にパーンダヴァ兄弟という皇帝の家庭に生まれたのです。そのため小さなころから、家族のなかで主クリシュナへの親密な献愛奉仕を知る機会に恵まれていました。パーンダヴァ兄弟は主の献愛者ばかりでしたから、もちろん家庭の崇拜の場所に神像が祭られていました。そのような家に生まれた子は、幸運なことに、遊んでいるときでも神像崇拜をまねるようになります。私も主シュリー・クリシュナの恩寵をさずかり、父をまねて主クリシュナを崇拜したものです。父も私たち子どもを、ラタ・ヤートラー祭やドーラ・ヤートラー儀式といったさまざまな機会に参加するよう導いてくれ、子どもや友だちのために惜しむことなくお金を使ってプラサーダを与えてくれました。私の精神指導者もヴァイシュナヴァの家に生まれ、偉大なヴァイシュナヴァの父であるタークラ・バクティヴィノーダから献愛奉仕へのあらゆる感動を授かりました。それこそがヴァイシュナヴァ家庭に生まれることの幸運です。名高いミーラー・バーイーは、ゴーヴァルダナの丘を持ち上げた方である主クリシュナの堅固な献愛者でした。

数多いそのような献愛者の生涯には共通したものがあります。偉大な献愛者たちの生涯のはじめには、いつも同じことが起こっているからです。ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、「マハーラージャ・パリークシットは、小さいころから主クリシュナのヴリンダーヴァナの幼少期の娯楽について聞いているはず」と言います。幼い友だちとその娯楽をまねしていたのですから。そしてシュリーダラ・スヴァーミーも、「マハーラージャ・パリークシットは、年長の家族が祭っていた神像の崇拜をまねていた」と言います。シュリーラ・ヴァイシュナター・チャクラヴァルティーも、ジーヴァ・ゴースヴァーミーの意見に同意しています。つまり、どちらの意見をとっても、マハーラージャ・パリークシットが幼いころから主クリシュナに対する愛情を自然に抱いていたことがわかるのです。上記のようなことをまねしていましたし、そのような行為すべてをとおして、かれが幼いころからマハー・バーガヴァタの兆しである強い信仰心を持っていたことの証になっています。このマハー・バーガヴァタたちをニッテャ・シッダ (nitya-siddha) 「生まれたときから解放されている魂」といいます。いっぽう、誕生したときから解放されていなくても、交流をとおして献愛奉仕への感情を高めていく人々もおり、そのようなかれらをサーダナ・シッダ (sādhana-siddha) といいます。結局どちらにも違いはありませんから、結論として、純粹な献愛者と交流しさえすればだれでもサーダナ・シッダ・主の献愛者になれる、と言い切ることができます。その模範となる方が、私たちの偉大なる精神指導者であるシュリー・ナーラダ・ムニです。前世では家政婦の息子だったのですが、偉大な献愛者との交流をとおして、献愛奉仕の歴史においても類を見ない主の献愛者としての揺るぎない境地に到達しました。

第16節

वैयासकिश्च भगवान् वासुदेवपरायणः ।
 उरुगायगुणोदाराः सतां स्युर्हि समागमे ॥ १६ ॥

vaiyāsakiś ca bhagavān
vāsudeva-parāyaṇaḥ
urugāya-guṇodārāḥ
satām syur hi samāgame

vaiyāsakiḥ—ヴァーサデーヴァの子; *ca*—もまた; *bhagavān*—超越的知識に満たされて;
vāsudeva—主クリシュナ; *parāyaṇaḥ*—〜に執着して; *urugāya*—偉大な哲学者たちに讃えら
 れている人格主神シュリー・クリシュナの; *guṇa-udārāḥ*—偉大な気質; *satām*—献愛者たち
 の; *syuḥ*—〜だったに違いない; *hi*—事実として; *samāgame*—〜の存在によって。

ヴァーサデーヴァの子であるシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、超越的な知識に
 満たされ、ヴァスデーヴァのご子息である主クリシュナの偉大な献愛者でもありました。
 ですから、偉大な哲学者や献愛者に讃えられていた主クリシュナについて話し合いがな
 されたはずです。

要旨解説

この節にある *satām* (サターンム) にはとても重要な意味がこめられています。 *Satām* (サタ
 ーンム) は「純粋な献愛者」という意味で、主に仕えることしか望まない人物を指します。そ
 のような献愛者との交流だけをとおして、主クリシュナの超越的な栄光について話しあう
 ことができます。主みずから言っていることですが、主の話題は精神的な重要性に満ちて
 おり、サターンムとの交流をとおして主について正しく聞けば、まちがいをなく強い力を感じ、
 自然に献愛奉仕の生活に入っていくことができます。すでに説明したように、マハーラー
 ジャ・パリークシットは生まれたときから主の偉大な献愛者であり、それはシュカデーヴ
 ァ・ゴースヴァーミーも同じです。両者とも同じ境地にいるのです——マハーラージャ・
 パリークシットは宮殿での生活になじみ、かたやシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは典
 型的な放棄階級の生活にいた人物で、衣服さえまとわない生活をしていたのですが。話を
 きくかぎりマハーラージャ・パリークシットとシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは正反
 対の状況にいるように見えますが、主の純粋無垢な献愛者であるという点でふたりは共通
 しています。そのような献愛者が集まれば、主の栄光を話しあうこと、つまりバクティ・

ヨーガ以外の話しあいはありません。『バガヴァッド・ギーター』でも、主と、そして主の献愛者アルジュナが話したとき、バクティ・ヨーガ以外の話題はしませんでした（通俗学者は自分流の推測をするのですが）。この節で、*ca* (チャ) のあとに *vaiyāsakīḥ* (ヴァイヤーサーキヒ) が置かれているのは、シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーによると、すでに決められていたように、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは師、マハーラージャ・パリークシットは弟子という立場だとしても、じつは両者とも同じ境地にいたのです。主クリシュナが話題の中心人物ですから、*vāsudeva-parāyaṇaḥ* (ヴァースデーヴァ・パラヤナハ) 「ヴァースデーヴァの献愛者」ということばは、主クリシュナという共通の目標を指しています。マハーラージャ・パリークシットが絶食をしていた場所にはほかに数多くの人々が集まっていたのですが、主クリシュナを讃える話題以外になにも話されなかった、と結論づけることができます。話していたのがシュカデーヴァ・ゴースヴァーミー、聞いていた中心人物がマハーラージャ・パリークシットだったからです。ですから、主の二人の主要な人物によって語られて聞かれた『シュリーマド・バーガヴァタム』は、至高主、人格主神、シュリー・クリシュナを讃えるためにあるのです。

【第2編・第3章・第17節】

第17節

आयुर्हरति वै पुंसामुद्यन्नस्तं च यन्नसौ ।
तस्यर्ते यत्क्षणो नीत उत्तमश्लोकवार्तया ॥ १७ ॥

āyur harati vai puṁsām
udyann astam ca yann asau
tasyarte yat-kṣaṇo nīta
uttama-śloka-vārtayā

āyur—寿命; *harati*—減少させる; *vai*—確かに; *puṁsām*—人々の; *udyann*—昇ること; *astam*—沈むこと; *ca*—もまた; *yan*—動くこと; *asau*—太陽; *tasya*—主を讃える者の; *ṛte*—〜以外; *yat*—〜である者によって; *kṣaṇaḥ*—時; *nītaḥ*—利用した; *uttama-śloka*—あらゆる面で善なる人格主神; *vārtayā*—〜の話題の中で。

太陽は、日の出と日の入りを繰り返しながら人の寿命を減らしている。あらゆる面で善なる人格主神について語りあうことに「時」を活用している者を除いて。

要旨解説

この節は、献愛奉仕に邁進しながら、至高主との失われた絆を悟るために生活を活用する重要性についても述べています。歲月人を待たず、と言います。ですから、日の出と日の入りが暗示する「時」は、精神的価値を悟るために正しく使わなければ、無駄に費やされているにすぎません。無駄に使われた寿命は、それがほんの一瞬だとしても、金をどれほど積んでも取りもどせません。人間生活は、生命体（ジーヴァ・jiva）に精神的正体と永遠な幸福の源を悟らせるためにあります。生命体、とくに人間は幸せになろうとするものです。幸福こそが生命体本来の状態だからです。ところが、それを物質的なことで満たそうとしている。生命体はもともと完全全体者の精神的火花であり、精神的な活動をすれば完全な幸福が得られます。主は完全な精神的全体者であり、主の名前・姿・質・崇高な娯楽・主にまつわるもの・主の人となりは、主そのものです。この主の特質の一つだけであっても、正しい流れを汲む献愛奉仕をとおして触れた人には、たちまちのうちに完成への扉が開かれます。『バガヴァッド・ギーター』（第2章・第40節）で、主がそのような接触について説いています。「献愛奉仕における努力は決して無駄にならない。失敗もない。ほんの少しでも行なえば、物質的な恐れという広大な海から救われる」。薬理効果の強い薬を静脈注射すれば、すぐに体全体に効果が現われるように、主の純粋な献愛者の耳をとおして注がれた主の超越的なことばは瞬時に効果を表わします。超越的なことばが耳をとおして悟られると、たとえば木が結実するとほかの部分も結実するように、完全な悟りが結果として現われます。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーという純粋な献愛者との一瞬のふれあいが、永遠性を追求する完璧な生涯へと導いてくれます。ですから太陽といえども、みずからを清めつづけながら、主への献愛奉仕に忙しく働いている純粋な献愛者の寿命を奪うことができません。死は、永遠な生命体に現われる物質的感染の印です。その物質的感染ゆえに、もともと永遠な生命体は生老病死という法則に縛られているのです。

慈善行為は物質的な敬虔な行為ですが、シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラが引用しているように、『スムリティ・シャーストラ』で勧められています。適切な人に差し出す金銭は、来世という銀行預金を作ってくれます。その慈善はブラーフマナにするよう勧められています。ブラーフマナではない相手（ブラーフマナの質をそなえていない人々）に与えられる金銭は来世で同額の金銭となって戻ってきます。半分しか教育を受けていないブラーフマナに与えるとしても、それだけでも倍になってもどってきます。博識な人物や十分な資質をそなえたブラーフマナにあげれば、何百・何千倍にもなってもどり、さらに、相手がヴェーダ・パーラガ（veda-pāraḡa）であれば、限りなく倍増されます。『バガヴァッド・ギーター』（第15章・第15節）で *vedaiḡ ca sarvair aham eva vedyah*（ヴェーダイシュ チャ サルヴァイル アハム エーヴァ ヴェーデヤハ）と述べられているように、ヴェーダ知識の究極点は人格主神、主クリシュナの悟りです。慈善に使われた金銭は、何倍になるかは別として、かならずもどると保証されています。同じように、主の超越的なことばを聞いたり語ったりするための純粋な献愛者との交流は、どれほど短くても、

永遠な生活、すなわちふるさとへ、神のもとに帰っていく完璧な保証になります。
Mad-dhāma gatvā punar janma na vidyate(マドゥ・ダハーマ ガトウヴァー プナル ジャンマ ナ ヴ
ィデャテー)。言いかえれば、主の献愛者には永遠な生活が保障されている、ということ
です。献愛者が歳をとったり病気になったりしても、それは保証された永遠な生活に導かれ
る確かなきっかけなのです。

【第2編・第3章・第18節】

第18節

तरवः किं न जीवन्ति भस्त्राः किं न श्वसन्त्युत ।
न खादन्ति न मेहन्ति किं ग्रामे पशवोऽपरे ॥ १८ ॥

taravaḥ kiṁ na jīvanti
bhastrāḥ kiṁ na śvasanty uta
na khādanti na mehanti
kiṁ grāme paśavo 'pare

taravaḥ—木々; *kiṁ*—〜かどうか; *na*—〜しない; *jīvanti*—生きている; *bhastrāḥ*—ふいご;
kiṁ—〜かどうか; *na*—〜しない; *śvasanti*—呼吸をする; *uta*—もまた; *na*—〜しない;
khādanti—食べる; *na*—〜しない; *mehanti*—精液を射精する; *kiṁ*—〜かどうか; *grāme*—周辺
で; *paśavaḥ*—動物のような生き物; *apare*—他の者たち。

木たちは生きていないでしょうか。鍛冶屋のふいごが呼吸をしていないでしょうか。私
たちの周辺にいる獣たちが食べ、射精していないでしょうか。

要旨解説

現代の物質的な人たちは、生活、あるいは生活にまつわるものは、神智学や神学の論点
にはならない、と言います。生活というものは、食べ、飲み、性的快楽、愉快的暮らし、
毎日を楽しむために、生きる時間をできるだけ延ばすためにある、と考えているのです。
現代人は物質科学を高めて永遠に生きたいと願い、最大限に寿命を延ばそうとする愚かな
理論が無数にあります。しかし『シュリーマド・バーガヴァタム』は、「人の一生は、食
べ、性生活を楽しみ、飲み、浮かれ楽しむという快楽主義哲学のために経済的に豊かにな
ったり物質科学を発達させたりするためにあるのではない」と断言します。一生はタパッ
シャのために、すなわち人間生活が終わったあとに永遠な生活に入ることができるように
みずからを清めるためにあるのです。

物質主義者はできるだけ長生きをしたいと思っています。来世についてなにも知らないからです。いま生きている間にできるだけ快適にすごしたいと考えるのですが、その考えも、死んだあとの命はない、と信じて疑わないからです。生命体の永遠性と物質界の移り変わりについて知らないことが、現代社会に大きな混乱をもたらしています。だからこそ数々の問題が起こり、さらに現代人が作りだす雑多な計画のために膨らみ続けています。問題を解決しようとしているのに余計に問題を悪化させているのです。また、100年以上生きられたとしても、文化が高まるわけでもない。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、何百年・何千年も生きる木がいる、と言います。ヴリンダーヴァナには、(イムリタラという場所に) 1本のタマリンドの木があり、主クリシュナの時代からそこに立っている、と言われています。カルカッタ植物園には5000年以上とされている菩提樹がありますが、そのような木は世界各地で確認されています。スヴァーミー・シャンカラチャーリヤは32年、主チャイタンニヤも48年しか生きていません。だからといって、長い歳月を生きた木々がシャンカラやチャイタンニヤよりも重要な存在である、ということでしょうか。「木は呼吸していないから命が宿っているわけではない」と考える人もいます。しかし、現代科学者ボセがすでに証明しているように、植物にも生命が宿っています。必ずしも呼吸が生命の兆しだとはかぎりません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、鍛冶屋の「ふいご」は大きな音をたてて呼吸をしているように見えるが、命があるわけではない、と言います。物質主義者は、木の生命体と人間の生命体とは比べられない、なぜなら人間はごちそうを食べたりセックスを楽しんだりできるが木にはそれができないのだから、と主張します。その主張に対して『シュリーマド・バーガヴァタム』は、同じ村で人と住んでいる犬や豚のようなほかの動物も食べたりセックスを楽しんだりしているではないか、と言います。この「ほかの動物たち」ということばは、食べ、呼吸し、性生活で構成されている動物生活を改善する計画をたてている人間たちも、結局は、人間の姿をした動物と同じだということをほのめかしています。そのような洗練された動物の社会は、苦しむ人々になんの恩恵ももたらすことはできません。動物はほかの動物にいくらかでも危害を加えても、良いことはほとんどしないからです。

【第2編・第3章・第19節】

第19節

श्विद्वाराहोष्ट्रखरैः संस्तुतः पुरुषः पशुः ।
न यत्कर्णपथोपेतो जातु नाम गदाग्रजः ॥ १९ ॥

*śva-vid-varāhoṣṭra-kharaiḥ
saṁstutaḥ puruṣaḥ paśuḥ*

na yat-karṇa-ṭathopeto
jātu nāma gadāgrajaḥ

śva—犬; viṭ-varāha—糞を食べる村の犬; uṣṭra—ラクダ; kharaiḥ—そしてロバによって; samstutaḥ—完璧に讃えられて; puruṣaḥ—人; paśuḥ—動物; na—決して～ない; yat—彼の; karṇa—耳; ṭatha—道; upetaḥ—到達した; jātu—いつでも; nāma—聖なる名前; gadāgrajaḥ—すべての邪悪からの救済者、主クリシュナ。

犬、豚、ラクダ、ロバ同然の者たちは、邪悪な物事から私たちを救う主シュリー・クリシュナにまつわる超越的な娯楽を聞かない者たちを讃えます。

要旨解説

大衆は、精神的価値にもとづく高い基準の訓練を正しく受けなければ動物と同じになり、この節はそのような大衆を「犬、豚、ラクダ、ロバ程度の動物」と呼んでいます。いまの大学で学生たちに教えているのは、「自分よりも強い主人に仕える犬の心理状態」になる準備です。教育期間を終えたあと、教養なるものを身につけた人々は、まるで犬のように仕事を求めて家々をまわるのですが、「空席はない」と断られるのがおちです。犬が取るにたらない動物で、小さなパン切れのために主人に忠実に仕えるように、人も十分な報酬をもらわなくても主人に忠実に仕えようとしています。

食べ物に見境がなく、どれほどひどいものでも食べる人たちは豚と比べられています。豚の大好物は糞です。これは、糞が特定の動物に用意されている食糧だということです。そして、石でさえ、ある種の動物や鳥にも食糧になっています。しかし、人間は見境なく食べる生き物ではありません。穀物、野菜、くだもの、ミルク、砂糖などを食べるようにできています。動物の食べ物と人間の食べ物は違います。固形物を噛めるように、人体にはそれなりの歯が用意され、その歯を使ってくだものや野菜を食べるのです。どうしても動物の肉を食べたいと思う人たちのために、2本の犬歯(けんし)も用意されています。「甲の薬は乙の毒」ということわざはだれでも知っています。人間なら主シュリー・クリシュナに捧げられたものの残りを受けいれるよう説かれていますし、主も葉、花、くだものなどの食べ物を受けいれます(『バガヴァッド・ギーター』(第9章・第26節)。ヴェーダ経典で定められているように、動物性の食べ物は主に捧げられません。ですから、人は特定の食べ物を食べるようできあがっているということです。よく言われることですが、ビタミンの栄養を採るために動物をまねるべきではありません。そのため、なんでも食べる人は豚と比較されています。

ラクダはトゲをおいしいと思って食べる動物です。家族生活や、俗社会の物欲を楽しみたいと思っている人が、このラクダにたとえられています。物中心の生活はトゲだらけで

すから、不幸な事態に善処するためにも、ヴェーダの規則という定められた方法だけに従って生きなくてはなりません。物質界で生きるということは、自分の血を吸うことで支えられています。物質的な楽しみに対する魅力の中心は性生活です。人はその生活を楽しむために自分の血を吸っているのであり、このことではもう説明はいらないかもしれません。ラクダはトゲのある枝を噛みながら自分の血を吸っています。食べているトゲがラクダの舌を傷つけ、血が口の中にあふれる——トゲが新鮮な血と混ざり、愚かなラクダに味あわせ、そのようにして、まちがった楽しみとしてトゲを食べることを楽しんでます。同じように、さまざまな疑わしい方法を使って儲けるために一日中働く有名な豪商や実業家たちも、自分たちの血と混ざった活動の結果というトゲの結果を食べています。ですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』は、このような病む人間たちをラクダと同じ段階に置いているのです。

ロバは、だれよりも、いいえどんな動物よりも愚かな生き物として知られています。ロバは、自分の利益にはならないのにできるだけ重いものがかつがされています。**脚注参照**。ロバはふつう、社会的にはあまり敬意を払われていない洗濯屋にこきつかわれています。この動物で特筆されることは、メスのロバに蹴飛ばされるのに慣れているという点です。交尾しようとするオスロバはメスロバに蹴られるのですが、性欲を満たすためにそれをおとなしく受け入れるのです。そのため、恐妻家はロバにたとえられています。大衆は、特にカリ・ユガでは、一日中あくせく働いています。しかもロバの仕事——テラーやリクシャで重い荷物を運びながら。文明と呼ばれているものも、じつは人がロバの仕事をしている結果です。巨大な工場や作業場の労働者たちもそういった途方もない労力が必要な仕事をしており、一日の仕事が終わったあとも、哀れな労働者は性欲を満たすために、あるいは多くの家事のために、ふたたび異性に蹴飛ばされるのです。

ですから、精神的な悟りとは無縁の俗人たちを犬、豚、ラクダ、ロバと比べることは、誇張されているわけではありません。そのような無知な大衆のうえに立つ指導者たちは、無数の犬や豚から崇められていることに誇りに思っているかもしれませんが、それは見かけ倒しにすぎません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、「人に見える犬や豚の大指導者でも、クリシュナの科学に味わいを感じていなければ、まさに動物」、と断言しています。力があり、強靱で、巨大な動物と呼ばれても、『シュリーマド・バーガヴァタム』の基準では、無神論的な気質ゆえに、人としての地位は与えられません。言い換えれば、犬や豚のような人間社会を率いる神を信じない指導者は、大半が動物の気質をそなえた巨大な動物にすぎない、ということです。

脚注

人間生活は価値を得るためにあります。人生は *arthadam* (アルタハダナム) 「価値を与えることのできるもの」と呼ばれています。では、人生の最大の価値とは？ それは、『バガヴァッド・ギーター』(第8章・第15節)で言われているように「ふるさとへ、神の元に

帰ること」です。利己的行動は、神の元に帰ることに向けられるべきです。ロバは、なにが自分の利益かわかりませんし、ひたすら他人のためだけに働きます。人間になったからこそ得られる個人の利益を忘れ、他人のためだけに懸命に働いている人は、ロバにたとえられています。『ブラフマ・ヴァイヴァルタ・プラーナ』で次のように言われています。

*aśitim caturaś caiva
lakṣāms tāñ jīva-jātiṣu
bhramadbhiḥ puruṣam prāpyam
mānuṣyam janma-ṣaryayāt*

*tad apy abhalatām jātaḥ
teṣām ātmābhimāninām
varākāṇām anāśritya
govinda-caraṇa-dvayam*

人間生活はひじょうに重要で、高位の惑星に住んでいる半神たちでさえ、地球に誕生したいと強く願っています。人間の体があればかんたんに神の元に帰られるからです。それほど重要な体をさずかったというのに、ゴーヴィンダ、主クリシュナとの失われた永遠の絆をとりもどそうとしない人は、自分の利益を忘れてしまった愚か者です。人体は、840万種類もある肉体のサイクルを一つひとつ通過してきたあとにさずかったもの。そして愚かな人は、自分にとってなによりもたいせつなことを忘れ、他人のために政治的解放や経済発展をもとめて、自分の地位を高めようと、幻にすぎない活動に追われています。もちろんそのような政治的・経済的な改善をめざすことが悪いわけではないのですが、人生のほんとうの目的を忘れてはなりません。慈善活動を神のもとにもどるために活用すればいいのです。この要点を知らない人は、他人や自分の心の幸せを感じることなく、ただ人のために働くロバに比較されています。

【第2編・第3章・第20節】

第20節

बिले बतोरुक्रमविक्रमान् ये
न शृण्वतः कर्णपुटे नरस्य ।
जिह्वासती दार्दरिकेव सूत
न चोपगायत्युरुगायगाथाः ॥ २० ॥

bile batorukrama-vikramān ye

na śṛṇvataḥ karna-ṣṭe narasya

jihvāsati dārdurikeva sūta

na copagāyaty urugāya-gāthāḥ

bile—へびの住む穴; *bata*—～のような; *urukrama*—すばらしく振る舞う主; *vikramān*—力; *ye*—これらすべて; *na*—決して～ない; *śṛṇvataḥ*—聞いた; *karna-ṣṭe*—耳の穴; *narasya*—その人間の; *jihvā*—舌; *asati*—無価値; *dārdurikā*—カエルの; *iva*—まさにそのような; *sūta*—スータ・ゴースヴァーミーよ; *na*—決して～ない; *ca*—もまた; *upagāyati*—大声で唱える; *urugāya*—歌う価値のある; *gāthāḥ*—歌。

人格主神の力やすばらしい行動をたたえる言葉を聞かず、主に関する価値ある歌を語ることも大声で唱えることもしない者は、へびの住む穴のような耳とカエルの舌をもつ人間と見なされます。

要旨解説

主への献愛奉仕は、体全体あるいは一部を使ってなされます。それは精神魂にそなわる超越的かつダイナミックな力の現われです。だからこそ献愛者は主への奉仕に100%没頭します。献愛奉仕は、体の感覚が主との関係をとおして浄化されたときにでき、感覚の力すべてを使って主に奉仕をすることができます。ですから感覚とその動きは、感覚満足のためだけに使われていれば、不純で物質的な状態にあります。浄化された感覚は、感覚を満たすためではなく主への奉仕に使われるようになるものです。主はすべての感覚をそなえた至高の方であり、その主に仕える召使いも、主の部分体ですから、同じ感覚をそなえています。『バガヴァッド・ギーター』が説明しているように、主への奉仕は「感覚を完全に浄化するための使い方」です。主は感覚すべてを使って教えをさずけ、アルジュナも感覚すべてを使ってその教えをさずかり、こうして師と弟子のあいだで感覚と理論にささえられた完璧な交換が行なわれました。精神的な理解というのは、宣伝するしか能のない者たちが言う「師から弟子への電気ショック」というばかげたものではありません。すべては感覚と理論をとおしてなされる完全な交換であり、服従心と真実であってこそはじめて可能になります。『チャイタンニヤ・チャリタームリタ』でも、「知性とすべての感覚を使って主チャイタンニヤの教えを受けいれよ、そうすることで偉大な使命を理論的に理解できる」と言われています。

不純な生きかたをすれば、どの感覚も俗なことにしか使われません。『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』について主から聞くという主への奉仕に耳を使わなければ、その耳の穴はごみくずで詰まっています。ですから、『バガヴァッド・

ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』のメッセージは、全世界で声を大にして広められなくてはなりません。それこそが、そのメッセージを完璧な情報源から真に聞いた純粋な献愛者の義務でもあります。なにかをだれかに話したい、とだれでも思いますが、ヴェーダの智慧という話題を話す訓練を受けていないために、話すのは無意味なことばかりで、人々も感覚を正しく使わずにそんな無駄話を聞きつづけています。同じように、世界中の人々も主にまつわる超越的な話題を聞くよう教わらなくてはなりませんし、そうなるように献愛者も大きな声で話さなくてはなりません。カエルが大声で鳴く結果、その声を聞いてやってくるヘビに食べられてしまいます。人間の舌はとくにヴェーダの聖歌を唱えるために与えられているのであり、カエルのようにケロケロと鳴くためではありません。この節で使われている *asatī* (アサティ) にも重要な意味がこめられています。これは、娼婦になった女性を指します。娼婦には女性特有のうるわしい名声はありません。同じように、ヴェーダ聖歌を唱えるための舌であっても、俗なたわごとだけに使っているのであれば、娼婦と見なされるのです。

【第2編・第3章・第21節】

第21節

भारः परं पट्टकिरीटजुष्ट-
मप्युत्तमारां न नमेन्मुकुन्दम् ।
शावौ करौ नो कुरुते सपर्या
हरेर्लसत्काञ्चनकङ्कणौ वा ॥ २१ ॥

bhāraḥ param paṭṭa-kirīṭa-juṣṭam
apy uttamāṅgam na namen mukundam
śāvau karau no kurute saparyām
harer lasat-kāñcana-kañkaṇau vā

bhāraḥ—大きな重荷; *param*—重い; *paṭṭa*—絹; *kirīṭa*—ターバン; *juṣṭam*—〜で着飾られて;
api—たとえ〜でも; *uttama*—上部; *aṅgam*—体の各部; *na*—決して〜ない; *namet*—ひれ伏す;
mukundam—主クリシュナ、救済者; *śāvau*—死体; *karau*—手; *no*—〜しない; *kurute*—〜する;
saparyām—崇拜している; *hareḥ*—人格主神の; *lasat*—輝いている; *kāñcana*—金製の;
kañkaṇau—腕輪; *vā*—たとえ〜でも。

体の頭部が絹のターバンで飾られていようと、ムクティ（自由）をさずけられる人格主神にひざまずかなければ、ただの重荷にすぎません。手も、きらめく腕輪で飾られて

いようと、人格主神ハりに仕えていなければ、死体を飾る腕輪にすぎないのです。

要旨解説

これまで説明してきたように、主の献愛者には3種類います。一流の献愛者は「主に仕えていない者はだれもいない」と考えますが、二流の献愛者は、献愛者とそうでない人たちを区別します。ですから、二流の献愛者は「教えを説くこと」が使命で、この節ではそれが「主の栄光を大きな声で説かなくてはならない」と表現されています。二流の献愛者は、三流の献愛者や献愛者ではない人たちを弟子として受けいれます。ときには、一流の献愛者でも、教えを広める目的で二流の献愛者の段階に降りてくることがあります。それでも、ふつうの人たち、つまり少なくとも三流の献愛者になる立場にある人たちは、この節で、絹のターバンか王冠を頭にかぶるほどの裕福な身分であっても、主の寺院を訪れ、神像にひれ伏すよう助言されています。主は、偉大な国王や皇帝をも含む万民の主ですから、凡人の目で裕福だとされている人たちでも、主シュリー・クリシュナの寺院を必ず訪ね、神像にひれ伏さなくてはなりません。崇拜できる姿で祭られている主を、石や木で作られているなどと考えるはいけません。寺院の神像として現われた主のアルチャー化身は、その吉兆な存在をとおして墮落した魂たちに限りない恩寵をしめしているものだからです。すでに説明されたように、「聴く」という方法をとおして、「寺院に主がいる」という悟りを得ることができます。だからこそ、献愛奉仕を実践する最初の方法——聴くこと——がとても大切なのです。『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』のような典拠ある情報源から、あらゆる献愛者たちが聴くことがなによりも大切です。物質的な地位で横柄になっていたり、寺院の神像にひれ伏さなかったり、科学的な知識を知らないのに寺院での崇拜を無視したりする凡人は、自分が頭にかぶっているターバンや王冠も、物質存在という海のなかにさらに沈んでいかせる重荷にすぎないということを思いしらなくてはなりません。頭に重りを乗せて溺れている人は、重りを乗せていない人よりも確実に速く沈んでいきます。愚かで横柄な者は神の科学を否定し、「自分にとって神はなんの意味もない」と言いますが、神の法則で脳血栓のような病に襲われ、物質的な財産という重りのために無知の海に沈んでいきます。神を無視して物質科学を高めるのは、人類社会という頭に重い荷物を乗せることですから、そうならないよう目を光らせなくてはなりません。

普通の仕事をし、主を崇拜する時間がほとんどない人なら、主の寺院を洗ったり掃除したりして、少しでも時間を充てることができます。マハーラージャ・プラターパルドラというオリッサの偉大な国王は、国を治める重大な責任のために多忙な日々をすごしていましたが、年に一度の主の祭典の日には、プリーの主ジャガンナータ寺院を掃除していました。たいせつなのは、どれほどの重要人物であっても、至高主の至上性を受けいれなくて

はならない、ということです。この神の意識が、たとえ物質的な繁栄に恵まれている人でも助けてくれます。マハーラージャ・プラターパルドラが主ジャガンナータにひれ伏す思いが、彼を力強い国王にしていたのであり、だからこそ、当時のパタン族でさえオリッサには侵入できませんでした。そしてプラターパルドラ王は、宇宙の主への服従心を受け入れたことで、主シュリー・チャイタンニヤの恩寵をさずかったのです。ですから、腕に金のブレスレットを飾っている裕福な男性の妻であろうと、主には必ず仕えなくてはなりません。

【第2編・第3章・第22節】

第22節

बर्हायिते ते नयने नराणां
लिंगानि विष्णोर्न निरीक्षतो ये ।
पादौ नृणां तौ द्रुमजन्मभाजौ
क्षेत्राणि नानुव्रजतो हरेर्यौ ॥ २२ ॥

*barhāyite te nayane narāṇām
liṅgāni viṣṇor na nirīkṣato ye
pādau nṛṇām tau druma-janma-bhājau
kṣetrāṇi nānuvrajato harer yau*

barhāyite—クジャクの羽根飾り; *te*—それら; *nayane*—目; *narāṇām*—人間の; *liṅgāni*—姿; *viṣṇoḥ*—人格主神の; *na*—～しない; *nirīkṣataḥ*—～を見つめる; *ye*—そのようなものすべて; *pādau*—足; *nṛṇām*—人間の; *tau*—それら; *druma-janma*—木として生まれて; *bhājau*—そのようなもの; *kṣetrāṇi*—聖地; *na*—決して～ない; *anuvrajataḥ*—～を求める; *hareḥ*—主の; *yau*—～であるもの。

人格主神ヴィシュヌの象徴（主の姿、名前、質など）を見ない目は、クジャクの羽に刻まれた目の模様、そして聖なる場所（主を思いだせる場所）に行こうとしない足は、木の幹にすぎない、とされています。

要旨解説

世帯を持つ献愛者には、神像の崇拝が特に勧められています。できるかぎり、世帯者なら精神指導者に導かれてヴィシュヌの神像を、たとえばラーダー・クリシュナ、ラクシュミー・ナーラーヤナ、特にシーター・ラーマの神像を家庭に据えつけるべきです。あるいは

はヴァイシュナヴァ・タントラやプラーナに勧められているように、主のほかの姿、たとえばヌリシンハ、ヴァラーハ、ゴウラ・ニターイ、マトウッシャ、クールマ、シャーラグラマ・シラー、他のヴィシュの姿、たとえばトゥリヴィクラマ、ケーシャヴァ、アチュタ、ヴァースデーヴァ、ナーラーヤナ、ダーモダラなど多くの姿の神像を据えつけ、家族こぞってアルチャナ・ヴィディ (*arcana-vidhi*) の指示や規則に厳格に従いながら崇拜しなくてはなりません。そして12歳以上になれば正しい精神指導者から入門式を受け、家族全員で主への日々の奉仕をします。それは、朝4時から夜10時まで続き、マンガラ・アーラートウリカ、ニランジャナ、アルチャナ、プージャー、キールタナ、シュリンガーラ、ボーガ・ヴァイカーリ、サンダー・アーラートウリカ、パータ、ボーガ (夜)、シャヤナ・アーラートウリカなど、と続きます。正しい精神指導者に導かれたそのような神像崇拜が、家族そのものを清め、精神的知識の道を速やかに進む助けになります。理論だけを説く本の知識は、初心の献愛者には充分ではありません。本の知識は理論にすぎませんが、アルチャナの方法は実践的です。精神的知識は、理論と実践を並行させて高めるべきもので、それこそが精神的完成を得る保証された方法です。初心の献愛者が実践する献愛奉仕の訓練は、弟子をふるさとに、神のもとに徐々に導く方法を知る熟達した精神指導者にかかっています。また精神指導者も、自分の家族を養うために仕事とするような偽物になってはいけません。弟子を「差し迫った死」という危機から救える熟達した精神指導者になるべきです。シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラが、精神指導者の正しい質について次のように定義しています。

*śrī-vidyāhārādhana-nitya-nānā-
śṛṅgāra-tan-mandira-mārjanādau
yuktasya bhaktāṁś ca niyuñjato 'pi
vande guroḥ śrī-caraṇāravindam*

Śrī-vighraha (シュリー・ヴィグラハ) はアルチャー (*arcā*)、すなわち崇拜するにふさわしい主の姿で、弟子は、*śṛṅgāra* (シュリンガーラ)、適切な装飾品や衣服、そして *mandira-mārjana* (マンディラ・マールジャナ) 「寺院の清掃」をとおして神像を定期的に崇拜しなくてはなりません。精神指導者はこの方法を初心の弟子たちに、優しく、そしてじかに教え、主の超越的な名前・質・姿などを徐々に悟れるように導きます。

特に音楽をともなったキールタナや経典の精神的教えに支えられた寺院での着付けや飾りをとおして、主への奉仕に集中することだけが、不快な映画やラジオから流れてくる無意味なセックス・ソングに対する魅力から私たちを救うことができます。家庭に寺院を用意できなければ、上記のプログラムが定期的に行なわれている寺院に行きましょう。献愛者の寺院を訪ねたり、巧みに、そして豪華に飾られた神聖な寺院での主の姿を見つめたり

すれば、自然に、俗な心は精神的な感情に満たされていきます。ですから、寺院や神像崇拜が特に行なわれているヴリンダーヴァナのような聖地を訪ねるべきです。以前は、国王や裕福な商人が、6人のゴースヴァーミーたちのような熟達した献愛者の指導を受けて寺院を建立しており、一般人はその寺院を訪ねたり、偉大な献愛者たち（アヌヴラジャ）の足跡に従って行なわれる祭典に参加したりするのが義務でした。しかし観光気分で神聖な場所や寺院を訪ねるのはもってのほか。主の超越的な娯楽によって不死の場所になった聖地や寺院は、この科学をよく知っている正しい人物に導かれなくてはなりません。このことを *anuvraja*・アヌブラジャといいます。Anu（アヌ）は「従うこと」という意味です。ですから寺院や神聖な巡礼地に行くときでも、正しい精神指導者の教えにどうしても従うべきです。そのように行動しない人は、「動くな」と主から罰せられた木と同じです。動く、という人間の特質は、観光地を訪ねるといふ行為でまちがって使われてしまいます。旅行を好む気質は、偉大なアーチャーリヤたちが築いた聖地を訪ねることで満たされますし、そうすることで、精神的知識のことをまったく知らない拝金主義者の無神論的な宣伝にまちがって導かれることもありません。

【第2編・第3章・第23節】

第23節

जीवञ्चवो भागवताङ्घ्रिरेणुं

न जातु मर्त्योऽभिलभेत यस्तु ।

श्रीविष्णुपद्या मनुजस्तुलस्याः

श्वसञ्चवो यस्तु न वेद गन्धम् ॥ २३ ॥

jīvañ chavo bhāgavatāṅghri-reṇuṁ

na jātu martyo 'bhibheta yas tu

śrī-viṣṇu-padyā manujas tulasyāḥ

śvasaṅ chavo yas tu na veda gandham

jīvan—生きているうちに; *śavaḥ*—死体; *bhāgavata-aṅghri-reṇuṁ*—純粋な献愛者の御足についた埃（ほこり）; *na*—決して～ない; *jātu*—いつでも; *martyaḥ*—死の; *abhilabheta*—特に受けいれて; *yaḥ*—人; *tu*—しかし; *śrī*—富と; *viṣṇu-padyāḥ*—ヴィシュヌの蓮華の御足の; *manu-jāḥ*—マヌの子孫（人類）; *tulasyāḥ*—トウラシーの木の葉; *śvasan*—呼吸をしているあいだ; *śavaḥ*—それでも死体である; *yaḥ*—～である者; *tu*—しかし; *na veda*—ぜったいに経験したことの無い; *gandham*—その香り。

主の純粋な献愛者の御足につく埃を一度も自分の頭に付けたことのない人は、すでに死んでいます。そして主の蓮華の御足から出ているトゥラシーの葉の香りを嗅いだことのない人も、たとえ呼吸をしていても屍（しかばね）にすぎません。

要旨解説

シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、呼吸をしている死体は幽霊である、と言います。人は死ぬと「死んだ」と言われるのですが、一般人の目に見えない希薄な姿でふたたび現われ、なにかをするのであれば、その死体は「幽霊」です。幽霊は常に不吉な存在で、だれにもおぞましい状況を作りだします。同じように、純粋な献愛者にも寺院に祭られているヴィシュヌ神像にもまったく敬意を示さない幽霊のような非献愛者は、いつも献愛者に恐ろしい状況を作りだします。そういった不純な幽霊がなにを捧げても、主はぜったいに受け入れません。好意を持つ人にその好意を示すまえに、その人が飼っている犬を好きになったほうがいい——と言われることがあります。純粋な献愛奉仕の境地は、主の純粋な献愛者に心をこめて仕えてこそ実現できるものです。ですから、献愛奉仕の第一条件は純粋な献愛者の召使いになることであり、それは「同じようにほかの純粋な献愛者に仕えている純粋な献愛者の蓮華の御足についている埃を受け入れる」という表現で満たされます。それこそが、純粋な師弟継承の道、すなわち献愛奉仕のパランパラ（paramparā）です。

マハーラージャ・ラフーガナが、偉大な聖者ジャダ・バラタに訊きました。「そのようなパラマハンサの境地をどのようにして手に入れたのでしょうか」。聖者が答えます（『シュリーマド・バーガヴァタム』（第5編・第12章・第12節））。

rahūgaṇaitat tapasā na yāti

na cejyayā nirvaṇāṇād grhād vā

na cchandāsā naiva jalāgni-sūryair

vinā mahat-pāda-rajo-'bhiṣekam

「ラフーガナ王よ。パラマハンサという献愛奉仕の完璧な境地の生活は、**偉大な献愛者の御足の埃**によって祝福されていなければ到達できない。タパツシャ・苦行をしても、ヴェーダの崇拝法に従っても、放棄階級の生活をして、世帯者生活義務を遂行しても、ヴェーダ聖歌を唱えても、あるいは灼熱の太陽の下、氷水の中、燃えさかる炎の前で苦行をしても叶うものではない」

言葉を変えると、「主シュリー・クリシュナは純粋で無条件に仕える献愛者の財産だから、献愛者だけがほかの献愛者にクリシュナを授けることができる」ということです。クリシュナをじかに得ることはできません。ですから、主チャイタンニャは自らを

gopī-bhartuḥ pada-kamalayor dāsa-dāsānudāsaḥ (ゴープイー・バハルトゥ パダ・カマラ
ヨール ダーサ・ダーサーヌダーサハ) (『チャイタンニャ・チャリタームリタ』マデヤ 第
13章・第80節)、「ヴリンダーヴァナでゴープイー(乙女)たちを養っている主の召使いに
仕えるもっとも従順な召使い」と呼んでいます。ですから、純粋な献愛者は主に直接近づ
こうとはせず、主の召使いに仕えている召使いを喜ばそうとし、それでこそはじめて、主
の蓮華の御足についているトゥラシーの葉の味を味わうことができます。『ブラフマ・サ
ムヒター』には、「ヴェーダ経典の大学者になったところで主を見つけることはできない。
純粋な献愛者をとおしてこそたやすく近づくことができる」と言われています。ヴリンダ
ーヴァナにいる純粋な献愛者たちは、主クリシュナの喜びの力であるシュリーマティー・
ラーダーラーニーの慈悲が授かるように祈ります。シュリーマティー・ラーダーラーニー
は、至高の全体者(クリシュナ)が持つ女性特有の心優しさがそのまま現われた方であり、
それは一般的女性の特質の完璧な境地に似ています。ですから、ラーダーラーニーの慈悲
は正直な献愛者にはいともたやすく手に入るものであり、そのような献愛者をラーダーラ
ーニーが主クリシュナに勧めれば、主はすぐにその献愛者を自分の交流に入ることを許し
てくれるのです。結論として、主からじかに慈悲を授かるよりも、主の献愛者から慈悲を
授かるためにもっと真剣になり、そうすれば(その献愛者の深い情けを授かって)主への
奉仕に対する本来の魅力を取りもどすことができる、と言えます。